

千葉県成田市三里塚周辺地域の 社会的・文化的特性に関する実証的研究

特に「開拓・開発」と「人の移動」に着目して

村 川 庸 子

1. 調査の進行状況

1997年度よりスタートした共同研究は、成田市開拓地の歴史に関する資料収集及び踏査の一般調査を経て、1998年度は個別対面面接調査の第二段階に入った。特に本年度は、第二次世界大戦後における沖縄出身者の入植と開墾期の諸問題、更には彼らのアイデンティティの形成と人生の様々な岐路での「選択」に決定的な影響を与えたと思われる「沖縄・久米島」のもつ意味を探るべく、当事者及び家族の面接を主とする現地調査を行った。調査の概況は次の通りである。

2. 調査報告

第1回（7月4日）

成田市在住沖縄出身者に対する面接調査

（昨年度の追加調査であり、本報告では内容を省略）

第2回（10月23-24日）

成田市における現地調査

新島新吾氏（成田教育委員会社会教育指導委員）と面談

調査結果の検討と今後の調査に関する打ち合わせ

成田市在住の沖縄出身者に対する面接調査

山里タケ氏（富里村御料のご自宅にて）

久米島生まれ、師範学校卒業後4年間、久米島で教員生活を送り、昭和4年に結婚して上京した。戦前は王子区（現在北区）に居住し、本人も数年間教員を勤め、夫は戦時中まで高等小学校の教員を続ける。戦時中は八王子に強制疎開。昭和22年、夫と6人の子供と共に成田に入植している。

面接では、成田での生活と久米島のことの両方を伺った。面接には長女、次女の方が同席。母娘のざっくばらんな会話からは、期せずしてかつての開拓村の様子（開拓地での苦労や子供の教育への思い、等）、当時の人々の微妙な心のずれ、等、生活の様々な局面が生き生きと見えてきた。久米島に関しても、タケ氏自身は、多くを語らなかったが、東京生まれ、東京育ちの長女、次女の方が、その文化的先進性について実に誇らしげに、雄弁に語られるのが印象的であった。

タケ氏の母方は上江洲という、久米島では殿

内と呼ばれる地頭、村長にあたる家柄で、本家の建物は現在国の重要文化財に指定されている。その上江洲家、久米島での社会的、経済的地位がすこぶる高かったと思われるこの家の人々が、久米島の戦前の海外移住、本土への移住、そして戦後の成田への移住の先駆けとなっている点に強く興味を惹かれた。

第3回調査（12月21－24日）

那覇市・久米島における調査

12月22日

(1) 石川友紀氏に面談（琉球大学文学部研究室にて）。石川氏の研究されている沖縄からの出移民についてうかがった。戦前沖縄の人々は、日本本土よりも寧ろ海外に移民する傾向があった。その理由としては以下の4点が考えられる。

- ① 廃藩置県以前は、沖縄は本土から支配され差別され続けてきたため、本土に移住した場合は差別が継続し、一層酷くなることが想定された。従って、本土とは無関係な海外に移住した。
- ② 海外進出に抵抗が少なかったのは、沖縄が小さな島々で形成された島国で、耕地が少なく島内で生活していくことに不安があり、一方で四方を海に囲まれていて、船が海外にでることに抵抗感が少ないことが挙げられよう。
- ③ 経済的に困窮して、次、三男が出稼ぎにでるといよりは、財産のある人、長男が積極的に海外にでるという傾向があった。
- ④ だが、長男がでていくことも経済的発展、成長を目指していたことは否定できない。従って、一族の誰かが海外に移住すると、その人が親戚知人を招き、他の島人もそのツテ

を頼って移住したので、海外移民が増加したと考えられる。

- (2) 上江洲智泰氏に面接（那覇市。久米島製糖株式会社にて）。戦後成田に入植。現在は那覇在住。久米島製糖株式会社社長。現在、自叙伝を執筆中である。稿を改めて報告したい。
- (3) 那覇市立図書館で移民関係の図書検索、目録作成。

12月23日

(1) 久米島内踏査

車で島内をほぼ一周、大まかな地形、地勢、主要産業などを見て回った。いくつかの集落を通り抜け、前日面接を行った上江洲氏が会長をつとめる久米島製糖会社を始め、漁協の魚市場、琉球王朝時代の役所である蔵元跡、袖会館、具志川城址などを訪れた。短期日の調査であり、島の歴史や現状に関しては、今後調べていきたいが、珊瑚礁に囲まれたこの島は、気候も温暖で、沖縄には珍しく起伏に富んでおり、かなり広い平地や小高い山、丘陵地もあって、水に恵まれた土地であった。古い家々は平屋が多く、漆喰で固めた赤味を帯びた屋根が美しい。門柱の上や屋根の上には魔よけのシーサが置かれている。台風に備えてか住居の周囲の軒端が長く突き出ており、檣や福木の柱が1メートルおきくらいに、この軒端を支えている。戦前は米作りが盛んで、二期作が行われていたが、戦後はどこもサトウキビの栽培に切り替えているという。島中至るところ、一見ススキと見まがいそうなサトウキビ畑が広がっていた。かつては細織りも盛んで、今でこそ県外から絹糸を買い入れているが、以前は養蚕を行って自前の絹糸を

千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究

とり、植物や泥で染めた色鮮やかな久米島紬を特産としていた。翌日の喜久永氏の話でも、当時、是が非でも海外に出なければならないというような経済状態にあったわけではなく、他の島に比べれば、比較的移民の数は少ないという。

(2) 上江洲智隆氏（成田の戦後入植に参加）、喜久永正氏に面接（上江洲本家にて）。上江洲家、島の歴史、戦前の海外移民、等について聞く。

上江洲家は、代々地頭役あるいは村長を務めてきた旧家である。風水の思想に従って築かれたというその家は、築後250年、国の重要文化財に指定されている。床の間には王家から拝領した額がさりげなく飾られている。（この翌日には、智隆氏に、島で最大という、珊瑚石でできているという巨大な上江洲家の墓を案内していただいた。）喜久永氏は代々伝わる『家譜』『父母記』を示しながら、家や久米島の歴史について詳細に語ってくれた。

何より印象的であったのは、やはり、喜久永氏の言葉の端々に表れる、大和に対するアンビヴァレントな思いであった。まず、『家譜』『父母記』のいずれも、年号は中国の元号をもとに綴られており、かつての清朝支配の影響の強さが感じられたが、沖縄的な言葉が含まれてはい

るものの、文法的には日本語であることが強調された。薩摩の支配、廃藩置県による「大和」への統合、戦後のアメリカの支配、復帰、そして現在。戦前に内地よりも外国により多く向かった移民に関しても、「中央政府に対する思想的な反発」、「日本語がうまく使えないとか、色々なコンプレックスのため」と言い切る。大和に対する反発は戦後も長く継続した。復帰運動は盛り上がったが、これは廃藩置県後の日本語、日本文化の影響の大きさと、言語も違うアメリカ支配には違和感の大きさによるものであったと指摘する。最近の知事選で敗れた太田氏も久米島出身。彼の父親も移民経験者でもある。

家の柱に残る機銃掃射の跡の無惨さ、歴史が沖縄の人々に残した傷跡の痛々しさと、そうした複雑な思いをベールで包み込むような彼らの優しさ、たくましが、深く心に残った。

2月24日

久米島新聞社訪問。

久米島在住者と島出身者を結ぶ小さな新聞社。島を愛した創立者の遺志を継いで彼の妻と娘とで発行され続けている。